

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第10回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日付：5月28日(月) 1日目

大学名：中国農業大学

氏名：尹肖貽

今日は訪日1日目、はずむ気持ちと期待は言葉では言い表されない。初めての海外、初めて飛行機に乗り、初めて日本を訪問し、初めて日本料理を食べた。今日は数え切れないほどの「初めて」を経験した。今、夜の11時、大阪城を臨む窓の外を列車が走りぬけて行った。まるで私の気持ちが伝染したように快活に力強く、遠くを目指して……。

飛行機の中は言うに及ばず、日本の第一印象はその「静謐さ」だった。誰もが「静謐」というルールに則って行動しているように思えた。飛行機の中の行き届いたサービスも旅を快適なものにした。

日本に着くと、愉快的な2人が待っていた。呂純玲さんと渡辺光男さんだ。呂さんは自分も中国出身で、「公務のために自費で」日本に来たと言い、渡辺さんは「裸で生まれて来た男」だと冗談たつぷりに自己紹介した。2人が代表団の食事や宿泊、安全を担当するというのだが、とてもよく考えられていると思った。

今日はそれほど重要な日程はなかったが、早めに着いたので、大阪で一番賑やかな商店街を見て歩くことになった。1.6kmの商店街は大阪及び日本で最長の商店街だということだったが、その距離の長さよりも精緻で清潔な環境が印象的だった。まさに日本随一の商店街という名に相応しいものだった。流行りのブティックや古い雑貨店、面白そうなゲームセンターに美味しいレストランと、多様な街がそれらの全てを包み込んでいた。目を惹く店の看板、店内のきれいなレイアウト、細かい所にまで拘る日本人のすごさを感じた。

日本は大きな国ではないが、世界を驚かすような力がある。日本には興味があるし、尊敬もしている。今日飛行機が着陸した空港は1997年に12年の時間を費やして竣工したという。空港建設のために山を一つつぶし、数キロ平米の海を埋め立てた。これからの数日間、日本のパワーと日本人の信念のようなものを感じてみたいと思う。

明日は友だちと早起きをして大阪城の石垣を見に行くことにしている。大阪城は天下人の豊臣秀吉が16世紀に建造した城だ。窓からその輪郭が見える。大阪は歴史と現代が融合した街だ。明日のために日記はこのへんにして寝るとしよう。

5月29日 朝

朝、大阪城に行った。ビデオをたくさん撮った。主に景色を撮った。みんなずいぶん早起きしていた。私は少し遅れて起きたが、大阪城にはみんなと一緒に行けた。朝の空気は北京よりもずっときれいだった。

日本人は早起きだ。中国と同じように朝早くからジョギングや体操をしていた。こんなに早く起きる習慣はなかったが、回りのこうした雰囲気感化されて晴れやかな気持ちになった。

城の主建築は「天守閣」と呼ばれ、数百年も前のものだが、その堂々とした様は当時のままだ。石垣の大きな石からは当時の城廓建築の気概が見て取れた。残念ながら、見学は9時からということで中には入れなかった。9時といえば、ちょうど京都へ向かっている頃だ。今日はワコール、清水寺、高台寺を見学することになっている。企業見学の初日だ。今から楽しみだが、責任の大きさも感じる。今日の日記はここまでとしよう。

日付：5月28日(月) 1日目

大学名：北京交通大学

氏名：傅一楠

朝9:40、最後にもう一度日本行き荷物の忘れ物がないことを確認してトランクの鍵をしめ、宿舎を後にした。

今日は日本へ旅立つ日だ。言葉にできないほどの感激が胸に満ちる。この行ったことのない国でたくさんの喜びに会えると思うと、期待に胸がふくらむ。出発前、大学の共青团委員会の先生方に挨拶をした。先生方が大勢で見送ってくれていたが、自分が単に交通大学の代表というだけでなく、中国の大学生の代表として日本に行き、両国の友好を深めるという責任を負っているのだということを再認識した。この責任をどう果たしていくかが、これからの10日間の大きな焦点になる。

あつと言う間に空港に着いた。飛行機に乗ったその瞬間、日本への旅が始まった。全日空の行き届いたサービスと客室乗務員の誠実な笑顔が印象的だった。さすが礼儀の国、日本だ。

3時間のフライトの後、大阪の関西国際空港に降り立った。きれいなターミナルビルが疲れを吹き飛ばしてくれた。見るものすべてが珍しく、新鮮に感じた。中でも一番印象的だったことは、日本人の民度の高さだ。トイレにきちんと並び、道にはゴミ一つ落ちていなかった。こうしたすべてが日本人の民度と自制心を表していた。礼儀や高い素養が国民一人ひとりの心に沁み込んでいるように見えた。誰もが信仰のようにそれを守っていた。これこそが中国人のマナーが日本と比べ物にならないほど悪かったり、中国の環境がどうしても日本のようにはならなかったりする理由のように思えた。日本には学ぶべき所がある。この10日間の友好訪問は実り多いものとなるだろう。

日本式火鍋(しゃぶしゃぶ)を食べ、日本の賑やかな夜の街も見学した。日本の流行りのファッションと独特の雰囲気私たちが惹きつけてやまなかった。明日の企業見学もきっと学ぶべき所がいろいろとあるだろう。明日が楽しみだ！

日 付：5月28日(月) 1日目

大学名：首都師範大学

氏 名：齊暢

今回、10日間の訪日活動に参加し、中日友好のために貢献できることは非常に幸運なことだと思う反面、責任も重大だ。

今日は旅の1日目。ずっとこの日を待ち望んでいたのに、なぜか実感がなかった。初めて中国を離れて一衣帯水の日本に長く滞在するのが不安だったのかもしれない。ところが、飛行機に乗り、全日空の客室乗務員のやさしい笑顔に触れるや、一気に不安が吹き飛んだ。客室乗務員は面倒がることもなく、飛行機に乗り込むすべての乗客に挨拶をしていた。見ているこっちのほうに疲れて来るぐらいだったが、無理をしてそうしているような感じはなく、その溢れんばかりの笑顔にこっちの気分まで晴れやかになるのが分かった。機内のサービスもいたれり尽くせりで、塩やコショウまで準備され、自分の家に帰ったような気分になった。

窓際の席だったので、外の様子がよく見えた。雲を通して日本が徐々に見えて来た。思い思いに建てられた家々、碧い水に囲まれた街、美しい島国がそこにあった。日本についての最初の印象は「静か」だということと「清潔さ」だった。日本は国土が狭く、人に迷惑をかけたくないという思いが強いせいも、とても静かだった。「清潔さ」については今さら言うまでもないだろう。日本が清潔なことは、日本に行ったことのある人が口をそろえて褒める。日本に着いてまず行った日本一長い商店街も賑やかだが整然としていた。

夕食の後、ホテルに向かった。ホテルのサービスもすばらしかった。これで今日一日の日程がすべて終了した。明日からの行程のために英気を養うことにしよう。

日 付：5月29日(火) 2日目

大学名：国際関係学院

氏 名：欧陽文俊

中国大学生訪日代表団の2日目。ワコールの見学を終えると、雨の中を京都に向かった。今日起こったことのすべてに「一期一会」という日本語が思い出された。日本の茶道から来たというこの言葉の中には日本の伝統と企業経営の精神的支柱が込められている。

日本に来る前のワコールについての認識は、日本の下着ブランドで、故郷広州の友誼商店の中に出店しているというぐらいだったが、今回の見学を通じてワコールは最も尊敬する下着ブランドになった。なぜならこのブランドには単に売上が多いとか、業界をリードする製造技術があるということ以外に、ブランドとしての理念の追求があるからだ。それはとても貴いことのように思う。見学で印象に残ったことは「揺り籠から揺り椅子まで」（女性のために幼年期から老齢期までの商品を提供する）という考え方だった。女性の一生を見据えて下着を提供するというこの言葉には、ワコールの卓越した経営理念が見て取れると同時に、ワコールのお客様に対する真摯なサービス精神の表れのようにも思われた。また、その商品開発の姿勢から、ワコールが常にイノベーションによってお客様のニーズを満たし、業界のトップランナーとして進化し続けていることが分かった。優れた企業の商品とサービスは、単なるサービスという概念を越え、それはある意味、企業精神と理念との貫徹であり体现である。「初心忘るべからず」。創業当初から今日の隆盛まで一貫して創業者の理念が生きている。やみくもに利益だけを追い求める企業は必ず滅びる。母親と娘が2代にわたって使える丈夫な商品を提供できるワコールのような企業だけが消費者の心を繋ぎとめることができるのだと思った。

午後の京都への旅は、天気あまり良くなかったが、それで楽しい気持ちが萎えるということはない。京都に着くや茶道の体験をした。茶道は中国をその起源とし、日本で大成され、今に伝わる。茶道で言う「一期一会」という精神は日本人の中に生きている。それは見学した企業の中にも見て取れた。お客様のために最高の商品とサービスを提供する、常に改善のための工夫をするというのは、まさにこの日本茶道の精神の表れだと思う。こうした優れた文化と経営理念の融合は、まさに中国企業が日本企業に学ぶべきところのように思われた。茶道を堪能した後、高台寺と清水寺を見学した。天気はすっかりせず、清水寺に行く途中で雨が降り出したが、それでも楽しく観光した。清水寺でおみくじを引いたら「凶」と出たが、初めてのおみくじはやはり面白かった。清水寺のおみくじがはずれ、残りの8日間がずっと「大吉」で、感動と実り多いものになりますように……。

日 付：5月29日(火) 2日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：衣虹暁

午前:ワコール

今会社が100社あるとする。50年後はそのうちの5社が残り、100年後には1-2社、あるいは生き残っている会社がまったくないという状況になるのではないだろうか。おそらく消滅した会社は利益ばかりを追及していた会社で、目標や理念のある会社だけが残る。

ワコールの目標は世界中の女性をより美しくすることで国や社会に貢献することだ。ワコールの人間科学研究所には1000万人のデータがあり、人体によりフィットする下着の開発をしている。ワコールは単に利益を追及するだけの企業ではない。社会に関心を寄せ、ピンクリボン運動を通じて病気で乳房を失った女性のための下着を研究開発したり、公益事業として少女向けに下着や体についての正しい知識を教えたりしている。ワコールはデザインや価格の安さよりも下着をつけた時の快適さを追い求めている。100万人のデータを分析して最も心地の良いデザインを開発している。

午後:茶道体験 清水寺

初めて茶道を体験した。先生に教えてもらいながら自分でも抹茶を点ててみた。日本という国は本当に細かい所にまで気を使う国だと思った。茶碗はどう持つか、どのように湯を茶碗に入れるかなどがきちんと決められていた。どの所作も細やかなものだった。日本文化の繊細さを垣間見たような気がした。

清水寺に行く途中、日本らしい店がたくさんあった。下駄や手ぬぐいが並べられ、日本の情緒に溢れていた。和服を着た女性にも会った。日本のどこに住みたいかと聞かれたら、迷わず歴史の香りのする京都と答えるだろう。雨が降り、観光客も多かったが、それでも古都京都は優雅な雰囲気を纏いつつ静かに雨の中にあった。

日 付：5月29日(火) 2日目

大学名：北京交通大学

氏 名：謝徳宝

一晩ゆっくり休んだ。今日は企業見学の1日目だ。見学先は株式会社ワコール。車は渋滞することもなく目的地に着いた。車がまだワコールの門に入らないうちから大勢の社員が出迎えてくれた。大企業のもったいぶったような態度がまったくなかった。

会社は京都市内にあった。周囲の建物はどれも低層で、古都の景観がよく保たれていた。ワコールの会社紹介は、どのようにすれば企業が長く続くかという設問から始められた。ワコールは女性の下着専門メーカーだ。1950年代に創業され、すでに半世紀の歴史がある。今に受け継がれる経営理念は、業績を上げて競争力をつけることではなく、人への思いやり、つまり世界中の女性をきれいにしたいという思いだ。商品の価格はそれほど安いとはいえないが、その品質は価格に見合ったものと言える。また、定期的に女性のための乳がん予防講座を開設しているという。商品の販売では、乳がん手術後の女性の補正に力を入れ、彼女たちが普通の生活にもどれる手伝いをしている。こうした社会貢献意識は中国企業も見習うべきだと思う。こうした会社を経営する際のコアとなる理念、即ち企業の文化理念の意義は、その後に見学したすべての企業に共通して見られた。

ワコールを後にし、午後は清水寺と高台寺の見学と茶道体験だった。「礼儀之國」という言葉は唐の時代に中国から日本に伝わったものだが、それは茶道文化の中に余すところなく体現されていた。碾茶、洗茶、点茶、点てた茶の出し方や飲み方、まったくいい加減なところがなかった。ちょっと堅苦しいと思われる儀礼の中に「静かなる禅」の境地が感じられた。「天を愛し人を敬う」、茶を供する際の敬虔な気持ちが胸に溢れた。こうした茶道精神が日本国民の民度の形成に果たした役割は計り知れない。

日 付：5月30日(水) 3日目

大学名：中国農業大学

氏 名：曾歆

前の晩夜更かしてしまったのでとても疲れていたが、今日の日程はすばらしかった。字がきたないのは眠いからで、お許してください！

主に静岡県農林技術研究所とその付属学校について書くことにする。案内役の先生はとても熱心で、丁寧に質問に答えてくれた。ここで開発された技術の普及に関する質問では、安定した技術は農家にとても良い形で採用されているという答が返って来たが、これこそが中国に欠けているものだと思った。中国では科学技術の農村への普及が大々的に叫ばれているにもかかわらず、技術を学ぼうとする意識に欠け(多くの場合)、技術の普及が遅々として進まない。中国は日本の農業経営モデル、つまり経営体についてしっかり学ぶべきだと思う。中国の農家は社会の底辺にある。苦勞して作物を育てても、安い価格で業者に引き取られ、業者がそれらを他の地方に転売する、どこまでいっても農家が儲からないようになっている。農村の若者の多くが、村で農業をやるくらいなら、都会でアルバイトをし

たほうが良いと考えている。「なぜ農業を専攻し、畑で作物を作ることを選んだのか」解らず、農林大学の学生に質問した人がいた。「高校生の時に畑で野菜を作る経験をしてすっかり好きになってしまったから」「親戚に農家がいるから」という答だったが、これはおそらく中国の大学生には理解できないことだ。自分が当時進学先に農業大学を選んだ時も回りの人たちは理解に苦しんだ。農業は国の根本であるとして、どの国も農業を重視しているが、中国人の考え方の中にはどうしても農民を見下すような気持ちがあるが、中国には膨大な農業人口がいること、自分たちの家も何らかの形で農民と関係があることを認めざるを得ないだろう。ともあれ今は農民の生活もだいぶ改善され、暮らし向きも楽になってきている。

<ヤマハ発動機>

ヤマハ発動機の二輪車工場はすばらしかった。部品自動供給機が軽やかかつ整然と部品を運び、時々音楽を鳴らしていた。生産ラインでは作業員が真剣に仕事をしている。平均2分間に1台の割合で二輪車が組み立てられるというのには驚いた。完成した二輪車はカッコ良かった。色が鮮やかでとてもいいと思った。記念写真(1人1枚)をもらった。嬉しかった。ヤマハはいろいろなものを製造しているが、マリン関連製品などは、中国にはさほどマーケットがあるようには思えなかった。中国では多くの都市でオートバイを規制している。大気汚染は二輪車だけが原因で、車は関係ないということでもあるまいし。それに自動車のほうが二輪車よりも安全だという保証もない。電気自動車の使用済電池による環境汚染のほうが問題は深刻だと思う。

<温泉旅館>

温泉にはいった。気持ち良かった！満喫した！温泉にはいったことはなく、初めての経験だった。何とも幸せ！

日付：5月30日(水) 3日目

大学名：首都師範大学

氏名：黄毓鴻

午前、静岡県農林技術研究所と農林大学を見学した。職員から研究所の組織についての説明があり、実際に温室にまで連れて行ってもらった。農業のことはよく知らないが、この農林技術研究所の見学を通じて農業に興味を湧いて来た。農林大学の授業を見学したが、学生の数は少なかった。言葉の関係で先生が何を言っているか解らなかったが、みんな真剣に先生の話聞いていた。学生の年齢は僕たちと変わらないようだったが、見たこともない農機具を慣れた手つきで操作していた。

農林技術研究所の次はヤマハを見学した。ヤマハは中国でもよく知られたブランドだ。オートバイを持つこと、特にヤマハのオートバイを持つことは男子にとっての夢だ。こんな気持ちでヤマハの工場を見学した。ヤマハの経営理念とその目指す所は「感動を・ともに・創る」。感動を創造するための原動力は飽くなき追求と細かい事への拘りだと思う。組み立て工場では、自動化レベルの高い製造ラインと真剣に仕事をする作業員によって、作業効率と製品品質がみごとに融合されていた。

それから新幹線に乗って箱根に移動した。夜は豪勢な会席料理に舌鼓を打った。懇親会では団員がそれぞれ芸を披露し、とても盛り上がった。食事が済むと、ほろ酔い気分で有名な箱根の温泉を楽しんだ。一日の疲れが吹き飛び、畳に敷かれた布団の上でぐっすり眠った。

日付：5月30日(水) 3日目

大学名：首都師範大学

氏名：楊肖肖

今日は疲れたが、充実した1日だった。午前は静岡県立農林技術研究所と農林大学に行った。農林技術研究所で

は温室と農場を見学した。日本の農業は中国とはだいぶ違っていた。まず、日本の農業の特徴は細かい所にまで気を配ることだと思った。農作物の品質にこだわり、ハイテクを駆使し、できるだけ農薬や化学肥料の使用を減らすことで、安全な農作物を心がけていた。次に、日本の農村と都市部の生活水準の格差が小さかった。ほとんど差がないようにも思えた。土地の私有権が認められていて、日本の農家は社会的に見て裕福な層に属しているようだった。農林大学は高校卒業後に農業を目指す人たちのための2年制の学校である。1年目は主に理論的な知識を学び、2年目は実践に重点が置かれている。いろいろな農機具を手にトウモロコシ畑で実習を行っているクラスがあった。ヒマワリを植えているところだった。

午後はヤマハ発動機株式会社の本社工場を見学した。ヤマハは感動の創造をその経営理念としている。二輪車を製造している第3工場を見学した。案内係の人が言うには、2分に1台の割合でオートバイを製造しているとのことだった。工場の中では各種部品が自動台車に乗せられて運ばれていた。組み立て作業は細かく分けられ、それぞれの作業員が責任をもって行っていた。効率アップのために、組み立てに必要な部品を置く位置までが厳しく決められていた。次々に組み立てられるオートバイ、ラインで真剣に働く作業員たち、胸があつくなった。

今夜の宿は箱根の温泉旅館。青々とした山に囲まれ、窓からは滝の音が聞こえる。カーテンを開けたときは、まるで自分が絵の一部になったような気がした。なんて美しい景色なんだろう……。夕飯は豪華な会席料理で、訪日後最初の懇親会ということになった。

大学ごとに出し物を披露した私たちの大学も興に任せて最後まで歌えない「小手拉大手」と誰も歌えない「最炫民族風」を歌った。一番良かったのは農大と交通大学の合唱「朋友」だった。歌の世界に引き込まれ、思わずみんな舞台上が上がって一緒に歌い出した。「朋友一生一起走，那些日子不再有，一句話，一輩子，一生情，一杯酒……」

懇親会の後は浴衣に着替えて温泉にはいった。初めての温泉は本当に気持ち良かった。寝てはいることのできるお風呂など、いろいろなお風呂があった。露天風呂からは月が見えた。気持ち良く温泉につかって部屋にもどった。今日1日疲れたせいか、あるいは温泉の効能か、すぐに眠ってしまった。

日 付：5月31日(木) 4日目

大学名：国際関係学院

氏 名：李琳

今日は充実した1日だった。箱根を出発して、午前には鎌倉を見学し、午後には横浜、夜は東京の銀座で夕飯を食べた。そして最後に楽しみにしていたニューオータニに着いた。

これまで資生堂というのは有名ブランドとしての認識しかなく、その社名の由来については知らなかったが、『易経』の中の「至哉坤元，万物資生(いたれるかなこんげん ばんぶつとりてしょうず)」という一句から付けたということだった。この社名の由来を聞いて、資生堂はきっと独特の企業文化を持った会社だと思ったが、果たして訪日団の乗った大型バスが鎌倉工場の玄関に着いた時、「良い品を良い人で、お客さまの喜びを私たちの喜びに」というスローガンが目に入った。メモをしたわけでもないのに、一目見て覚えてしまったのは感動したからだ。このスローガンを見て、資生堂がお客さまを自分の友人のように大切に思っていることが分かった。会社説明や工場見学の時も社員の誠実さと友情が伝わって来た。資生堂がなぜ今のような国際的な大ブランドになれたか分かったような気がした。

午後は係留されている観光船「氷川丸」を見学した。船に乗ったことのない私は、見学の間中「タイタニック」のことを考えていたが、「氷川丸」のほうが「タイタニック」よりもずっと生命力があると思った。「氷川丸」には豪華さと歴史がある。豪華さという点では、1、2、3等に分かれたレストランやステージ、喫煙室があるほか、船体を安定させるための装備が取り付けられていて陸地のような安定感があった。歴史の古さということでは、「氷川丸」は日本で唯一第二次世界大戦の戦火を逃れた船だけあり、今も大海を航行していた当時の雄姿を伝えている。

日 付：5月31日(木) 4日目

大学名：中国農業大学

氏 名：尹肖貽

<午前 曇り後晴れ 資生堂の見学>

朝、目を醒ますと、同室の3人は温泉に入りに行っていた。みんななんて元気なんだろう。僕は疲れていたので行かなかったが、朝食の場所の優雅な雰囲気と窓の外の景色が、朝温泉に入りに行けなかった後悔をすっかり吹き飛ばしてくれた。

午前の見学は、30分ほど遅刻した団員がいたために、資生堂に着いたときには9時半になっていた。資生堂は古くて若い会社だった。販売部門の人が見学の対応をしてくれた。会社紹介の後に生産ラインを見学することになったが、白衣と帽子で全身を覆い、手はアルコールで消毒し、体についた埃は送風機ではらうなど、工場内の衛生面の要求の厳しさは相当なものだった。口紅を生産するときに使う製剤は、原子レベルの技術を開発するのに20年の時間を費やしたということだが、この忍耐力とどんなことも疎かにしない態度に感服した。

資生堂のもう一つの特色として、社員が自分の会社を大切に思い、社員の一人ひとりが会社をしょって立っているという気概がある。「気合を入れて職場のやる気を引き出し、心を沸かして、心をこめて商品をつくり、思わず商品に“ありがとう”と言いたくなる」とあるエンジニアが言っていた。商品検査担当の人は「こうなればいいと思うことを現実のものにし」、最高の品質を以って「お客様に報いる」とも言っていたし、「お客様の希望する物以上のものを作る」と言葉も聞いた。

見学の案内役の人が説明してくれた「擦りガラス」の原理で顔のシワをのばす方法や、生産ラインの作業員の名札によって担当の仕事を見分けるようにしているなど、真面目な態度で仕事に臨めば、不合格の製品が出ることはほとんどないだろう。優れた製品を生み出す資生堂の秘密はこのあたりにあるのかもしれない。

<午後 晴れ 氷川丸と郵船歴史博物館の見学>

氷川丸は日本の豪華客船の誇りであり、今は山下公園に観光用に係留されている。氷川丸はもともとは豪華客船だったが、戦争が始まってからは輸送船として徴用され、その後も30年にわたって航海を続けている。鋼板の厚さは18.3mmと、現在の10mmの約2倍の厚さになっている。リベット接合のために船体が重かったので、今は1週間ですむ横浜からシアトルまでの航海に2週間を要したという。氷川丸の計装類と駆動システムに興味があったが、知識不足でうまく質問することができなかった。みんな写真を撮りまくっていた。最後に船長さんと記念写真を撮った。

郵船歴史博物館では各種船舶や郵船の歴史が紹介されていた。残念なことに第二次世界大戦中に大部分が沈没してしまったというが、日本の海運業は依然として発達している。大学生訪日団の見学用にということではなく、館内資料の中に中国の海運業に関する記述が何カ所もあった。例えば、鉄鋼や原油の船舶輸送に関する説明では、日本の状況が紹介されたすぐ後に、中国がいつ日本を超えるかという記述があったが、これは国力と関係があると思った。いずれにせよ、博物館のこうした態度、真実を伝えつつも自国と他国の違いを分析するという科学的態度は中国も学ぶべきだと思った。

日 付：5月31日(木) 4日目

大学名：北京交通大学

氏 名：沈慧

資生堂という社名は、『四書五経』史列最初の経書である『易経』の坤卦部分の「至哉坤元，万物资生(いたれるかなこんげん ばんぶつとりてしょうず)」に由来し、新しい生命を育む大自然の恩恵に感謝した言葉だというが、この社名は資生堂の常に新しい価値を発見・創造していこうとする精神を十分に体現しているように思う。1872年、東京の銀座に日本初の西洋式薬屋が出現した。資生堂の誕生である。今や100年の歴史を誇るグローバル企業は、東洋の美学

と西洋の科学技術の結合を目指し、今も世界の人々に豊かで美しい生活を届けるための努力を続けている。今や資生堂は日本だけでなく、世界各国の消費者に歓迎される企業になっている。

資生堂には「良い品を良い人で、お客さまの喜びを私たちの喜びに」という理念がある。会社の紹介ビデオを見て驚いたのは、すべての社員がその仕事のいかににかかわらず、溢れんばかりの情熱をもって仕事に取り組む姿だった。研究所では新商品開発のための試験が何度も行われ、工場では品質確保のために厳しい品質検査が行われている。こうした部門間の協力があってはじめて高品質の商品を消費者に届けることができるのだと思う。製品の一つひとつが社員一人ひとりの智慧と技術、汗の結晶だ。それを示すものとして挙げられた例が印象に残る。女性の唇に潤いを与える商品を開発しようということになったとき、研究員が曇りガラスの反射原理を使うことを思いついた。そして20年もの歳月を費やして終にパールパウダーを加えた口紅を開発したという。こうした消費者に対して責任を果たそうとする姿勢や旺盛な研究意欲は、中国も見習うべきだと思った。

また、資生堂はその豊富な経験とスキンケア商品の技術によって「優れた品質、優れたイメージ、優れたサービス」という販売理念を代々受け継ぎながら、社員の職場環境を整えることに努め、全ての力と資源を公益事業に捧げ、責任ある企業市民に成長している。「一瞬も一生も美しく」というコーポレートメッセージは、資生堂と消費者との間で交わされた重い約束であり、社員の一人ひとりが心を合わせて努力し、消費者に優れた商品とサービスを提供することを目指してこの使命を履行している。工場見学では、大型設備や自動化された生産ライン、更には作業員に対して厳しい除塵要求を設けることで清潔な環境を保ち、品質を保障しているところが印象に残った。

次の日本郵船の氷川丸と博物館の見学では、日本という島国の航海・郵船業の潜在力を感じた。氷川丸の船上見学では、日本の郵船業が紆余曲折を経て今に至ること、最初は長崎しか対外的に開放されていなかったこと、氷川丸だけが戦時中に軍用に徴用されながらも第二次世界大戦の戦火を免れて生き残り、その82年のキャリアには特別な歴史背景があったことを学んだ。1953年以降、日本の海運業も回復し、貨物船及び客船として氷川丸も太平洋を航行していたが、1961年に山下公園の埠頭に係留されることになる。ちょうど横浜開港100周年目ということで、氷川丸の見学が一層感慨深いものになった。

博物館では日本の海運史が紹介されていた。1000隻にも及ぶ船の模型が陳列されていたのには驚いた。航海事業の発展に伴う旅行用トランク、雑誌、文献、各地の風俗を紹介した記事など、海に関する文化について学ぶことができた。博物館は規模こそ小さかったが、膨大な歴史的記録を収蔵しており、日本の海運業の変遷やそれぞれ特徴のあるマリン文化を体験させる力があつた。

日 付：6月1日(金) 5日目

大学名：中国農業大学

氏 名：楊妍

今日から6日間の東京の旅が始まった。バスに乗って長い時間移動しなくてすむということは、朝の5時、6時に起きなくてもよいということであり、十分な睡眠時間をとって旅の疲れをとることができるので嬉しい。起床後は下に降りて朝食をとることになっていた。どのレストランで食べるか、3人であれこれ悩んだ末、最初の朝の食事は景色の一番いいレストランでとることにした。窓の外の木々や池の鯉を見ていると、こっちまで清々しい気持ちになった。

まず六本木ヒルズで「ONE PIECE」展を見た。「ONE PIECE」は中国語では「海賊王」と訳されている。この漫画は尾田栄一郎の原作で、その人気はさまざまな年齢層にまで及ぶ。これまでに66冊の単行本が出版されているが、日本だけでも2億6000万冊を売り上げているという。「海賊王」は読んだことはないが、朝早くから列をつくって漫画展を見ようとしている人たちを見れば、この漫画がどれだけ人気があるかが分かる。「ONE PIECE」展では、原作者の高い技術と想像力が漫画の原作や動画によって展示されていた。ちょっとしたスケッチからキャラクターが生まれ、鮮明なイメージが作られていく過程が印象的だった。

昼食の後はJR東日本を見学した。JR東日本は日本の国鉄分割民営化後に誕生し民間鉄道会社4社のうちのひとつである。経営範囲は東京・千葉・神奈川・埼玉といった東日本一帯で、4社のうちで規模が最も大きい。JR東日本の業務のうち運輸業や「駅ナカ」ショッピングモールや土地の賃貸業務で採算がとれていないという。JR東日本の経営上の最大の課題は安全問題で、次にいかに国内旅行する人の数を増やすかということと技術の開発という問題がある。技術の進歩により列車のエネルギー消費が減り、効率がアップしているほか、安定性と騒音削減面でも成果をあげているが、収益拡大という目的で路線を増やしたり生活サービス型業務にも力を入れている。

最後は三菱商事株式会社の見学だった。三菱商事は日本有数の総合商社の一つで、主に産業投資、特にエネルギー産業への投資が活発である。マネジメントのできる優秀な人材を派遣したり、資金や提携のための協力ネットワークを提供したり、あるいは産業型企業と協力関係を築くなどして配当をはじめとするさまざまな収益を得ている。

夜は東洋文庫を見学した後、三菱商事の社員との懇親会があった。東洋文庫には膨大な数のアジア地域の古い文献が収蔵され、国宝級の作品もあった。三菱商事の社員との懇親会は日本や三菱商事という企業を理解するのに役立った。

日付：6月1日(金) 5日目

大学名：北京交通大学

氏名：沈慧

午前には日本だけでなく中国の若者までが夢中になっている「ONE PIECE」展を見に行っただけではないが、彩り鮮やかなアニメのキャラクターや漫画原稿を見て、世界のアニメ産業の原動力とも言える日本アニメが、独特のキャラクターやストーリーによって誰にも真似のできないアニメ文化を形成し、世界に発信し続けているすごさをあらためて思った。

次のJR東日本旅客鉄道株式会社の訪問は、北京交通大学の学生として実り多いものだった。特に以下の点が勉強になった。まず日本の鉄道経営モデルである。深刻な業績不振を払拭するために、長年赤字続きの国営企業に大転が振るわれ、組織改編によって民営化されることになった。JR東日本では新しい経営手法が採用されていた。68%は鉄道運輸の収益だが、残りは「駅ナカ」ショッピングモールや土地の賃貸、車内広告の収益だという。特にSuicaが収益増に貢献している。これらは中国の鉄道経営方式には見られないものなので参考になると思う。会社紹介では安全、環境保全、技術開発面の課題や主な手法についての説明があったが、一番印象的だったのは、JR東日本が常に安全を何よりも優先させている点だ。毎年利益の大部分を最先端の安全システムに費やし、地震や台風時の乗客の安全確保に努めている。

また、JR東日本は時代に合わせて経営戦略を変えることで、マーケットの変化に対応して付加価値を高めている。今、日本では高齢化問題が深刻さを増し、人口も減ってきているが、それはJR東日本の乗客大幅減にも繋がる問題である。こうした外部圧力に対応すべく、JR東日本では新型の省エネハイブリッド車両を開発したり、新幹線の建設を強化し観光ルートの開拓したりして収益アップに努めている。中国企業にとっても参考になる戦略的な経営だと思う。急成長のただ中にある中国にはチャンスもあるが、課題もある。現実に即したイノベーションと課題を解決していく努力しないことには企業の成長はない。中国の鉄道の現状を念頭に、交通大学の学生としてJR東日本の技術的な強みや雪害対策、世界屈指の騒音削減技術、車両の色やインテリアの地域的特色等について質問してみた。日中鉄道友好推進協議会の先輩技術者達とCRH2とCRH5の運行や通風システムについて意見交換をしたが、2つを比較することで今の中国の鉄道に不足しているものが何であるかがはっきりと分かったし、日本が得意とする技術はやはり参考になると思った。今日の見学は今後の勉強とキャリアプランにとっても役に立ったような気がする。

次の三菱商事本社の見学では、国際的な総合商社の経営理念「三綱領」について学んだ。「所期奉公」(事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえのない地球環境の維持にも貢献する)、「処事光明」

(公明正大で品格のある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する)、「立業貿易」(全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る)。三菱商事はまさにこうした企業理念によって今日のような国際的な総合商社になることができた。三菱商事は日本国内と約90ヶ国に200以上の拠点を持ち、500社以上の連結子会社と共にビジネスを行っている。社員との懇親会ではお互いの企業、文化、青少年の教育面の違いや特徴について話した。東洋文庫を見学した後、三菱商事の社員と一緒に夕食をとりながら、日本の家庭や仕事のストレス、これからのライフプランなどについて話したことで、日本企業と日本人についての理解が深まったような気がする。

日 付：6月1日(金) 5日目

大学名：北京交通大学

氏 名：傅一楠

今日は「国際子どもの日」だ。20歳の青年にも童心はある。日本商会と中日友好協会はこの点を十分承知していて、「国際子どもの日」に相応しい日程を用意してくれていた。特に楽しかったのは「ONE PIECE」展だった。六本木に向かう車の中でも多くの団員が待ちきれない様子でそわそわしていた。会場に入る前に渡辺さんからこのアニメを見たことがあるかと聞かれた。「ちょっと見たことがある」と答えた。「ONE PIECE」はそんなに見たことはないが、その中で描かれているアドベンチャー精神には惹かれるものがある。一群の熱血青年が目標に向かって困難に立ち向かっていくときの団結力、互いを思いやる心、彼たちの困難とそれに打ち勝っていく姿に心打たれた。また、日本のアニメ産業の急成長とその成功ぶりを肌で感じる事ができた。さまざまなビジュアル的な楽しさのほか、アニメの中に体现されている精神について考えた。中国に「一花一世界，一葉一菩提」(一輪の花に世界を見、一枚の葉に如来を見る)という言葉がある。取るに足りない小さな物でもその背後に深い意味がある。アニメ的一幕一幕に人々は啓発され、私自身も数え切れないほどの感動をもらっている。

「ONE PIECE」展の興奮も冷め、次にJR東日本を見学した。JR東日本には150年の歴史があり、ホームの数は合計1689本、総運行距離7512キロメートル、1日当たりの乗降客数1659万人。膨大な鉄道を経営し、かつ毎年利益をあげているというのは世界でも珍しい。JR東日本がどのような技術と経営理念によってこうした世界屈指の地位を築いて来たのか、興味を持った。会社紹介の説明を聞いているうちに、先進的な日本の鉄道技術は速度だけを問題にしていることが分かった。日本で製造される車輛は速度、安全指数、快適性等のさまざまな角度から設計されている。いといと研究を重ね、調査・分析によって技術の改善を図り、走行時の揺れやカーブ時の傾きを減らすなどして安全で快適なものをという目標を達成している。おそらくこうした技術は中国にはないだろう。また、JR東日本では行先に合わせて車内のインテリアを変えるなど、細かい心遣いによって有数の鉄道会社になっている。

JR東日本の次は三菱商事を見学した。三菱商事の社員と一緒に東洋文庫を見学し、夕食を共にした。一番心に残ったことは、三菱商事の巨大な産業チェーンと社員の仕事に対する姿勢だった。また、三菱商事の投資を中心にした経営手法にも驚いた。まるで不可能なことではないとでも言うように、業務をさまざまな分野に拡大して成果をあげている。三菱商事のトップが言うには、社員教育を非常に重視しているので、どの社員も能力が高いという。企業は優秀な社員の育成に成功し、社員は自分の会社を優良企業にすることに成功したことになる。

今日は収穫が多く、いろいろと考えることも多かった。充実した「国際子どもの日」だった。まだあどけなさの残る他の団員にとっても楽しい1日でありましたように……。

日 付：6月2日(土) 6日目

大学名：国際関係学院

氏 名：于文華

終に待ちに待ったHomestayの日だ。ここ数日、訪日団の団員としていつも団体行動で工場や企業を見学し、たくさんのお話を学んで来たが、それは1人で日本の街を歩き、自分の力と語学力だけを頼りに日本の家庭を体験するのではまったく気持ちが違って来る。その意味でこの10日間の旅で一番楽しみにしていたのが1日半のHomestayだ。

言うまでもなく、中日両国の間には歴史的な理由によって硬くて溶けない氷がはっている。日本語を勉強したことがなく、日本の文化をまったく解さない人たちにとっては、日本という国や民族について語るのはやはり不愉快なことかもしれないが、両国の国民同士の交流がなければ、こうした認識はいつまでも続き、なかなか改めることはできない。このように考えると、民間交流こそが氷をわるための最も有効な石だということが分かる。日本人の友情と中国人に対する態度をしっかりと受け止め、親しい人たちに伝えていきたいと思う。ささやかなことかもしれないが、十分意義のあることだと思う。

今回日本に来て自分の日本人に対する見方がずいぶん変わったように思う。ずっと両国の間には壁や摩擦があるように思っていたが、今思えば、まったくの思い過ごしだった。中国は日本の不幸な過去に、日本は中国の貧困に苦しむ人々に同情している。まさに世界は一つであり、こうした友情と思いやりは民族の枠を越えて生まれる。

中日友好協会と中国日本商会はすでに10回の「走近日企・感受日本」活動を行っている。これは大学生を対象にした活動であり、期待した通りの成果をあげている。こうした活動は大学生の成長にとって有益だけでなく、中日両国の民間交流や経済協力、あるいは政治的緊張の緩和という意味でも有益なことだと思う。この活動がさらに内容豊かで充実したものとなって長く続いてほしいとも思う。それは中国の大学生にとって喜ばしいことであり、中日両国民の願いを叶えるための良い方法のように思われる。

日 付：6月2日(土) 6日目

大学名：国際関係学院

氏 名：王瀚霖

今日は待ちに待ったホームステイの初日だ。日中経済協会には時間よりも早く着いた。皆そわそわしながらホストファミリーが迎えに来てくれるのを待った。この感覚は、ちょうど孤児院の子どもがお利口さんにして新しい「お父さん」「お母さん」の家に連れていってもらったときのそれと似ていると思った。

しばらくすると、団員が次々と嬉しそうにしてホストファミリーの人と一緒に出て行った。それにしても僕のホストファミリーはなかなか来ない。とうとう僕1人を残すだけとなった時、ようやく秋葉さんが来てくれた。30歳ということだが、ちょっと30歳には見えなかった。すらりとしていて、ヘアスタイルもカッコよく、まるでお兄さんのようだった。

秋葉さんはまず本屋さんに入って中国語の教科書を買って、地下鉄の駅まで「ダッシュ」した。あえて「ダッシュ」という言葉を使う。地下鉄の乗り換えの時は100mのラストスパートのようなスピードで階段を降りた。一気だった。秋葉さんはケロッとしていたが、僕はできるだけ平静を保ち、何でもないふりをしていた。

秋葉さんに運動が好きかと訊かれたので、「フィットネスが好き」と答えると、彼は嬉しそうに「自分も」と言った。ヒマがあればスポーツジムに行ってテニス、サッカー、水泳、自転車、有酸素運動をしていると言う。ジムに行きたいかと訊かれた。行きたくないとは言えなかったのだから、覚悟を決めて行くことにした。電車に乗ってまず秋葉さんの家に行き、23歳になる弟さんに会った。就活中ということで挨拶をただけだった。その後、車で柏市内のスポーツジムに行った。日本人は中国人よりもずっと運動好きのようだった。水泳、テニス、ランニングマシンどれも大盛況で、予約制になっていた。僕と秋葉さんはバーベル運動を1時間ほどやった。頑張ったが、最後の数分間はギブアップしてしまいそうになった。膝がガクガクしていた。回りを見ると、若い人も年のいった人も諦めたりサボったりしている人は一人もいなかった。

これには驚いた。

次はテニスをやろうとしたが、人が多くて一人分しか空いていなかった。秋葉さんは自分だけやるわけにはいかないと言って、1時間ほど待ってスピニングバイクに乗ることにした。中国ではいつも自転車に乗っているので大丈夫だと思ったが、それは考えが浅かった。普通に自転車をこぐのだとばかり思っていて、まさかお尻を浮かしてこぐとは思ってもよらなかった。これには参った。後半は膝が自分の体重を支えきれなくなっていた。あさって以降の日程に影響が出ては大変だと思い、最後はお尻を浮かしてこぐのをやめることにしたが、日本人の頑張りには本当に驚いた。誰もギブアップしなかった。後ろにいるインストラクターの声に合わせて気合を入れ、いい加減にやっている人は1人もいなかった。「ああ、中国の若者よ、もっと熱くならなければ……」。

スポーツジムでの運動が終わってお風呂に行くことになったが、秋葉さんが気を利かせてクレンジングクリームとシャンプーを用意してくれていた。それ以外にもスイミングパンツやウェア、靴を準備してくれたり、事前にジムのトレーナーに声をかけておいてくれたりと、僕の今日の訪問のためにいろいろと準備をしてくれていた。それから車でデパートを2ヶ所回って秋葉さんお勧めのドーナツを探した。運動の後のスイーツとコーヒーは格別だった。

スイーツを食べ終わると、電車に乗って秋葉さんのおばあさんが住むマンションに行った。ドーナツが夕飯のかわりだと思っていたが、おばあさんが特急で美味しい夕飯を作ってくれた。カツ丼はレストランの味と変らなかった。おばあさんはわざわざ僕のためにパジャマを用意してくれていたばかりか、自分のベッドを僕に譲って自分は布団を敷いて寝ると言って譲らなかった。本当にありがたいと思った。何度も自分が布団で寝ると言ったが、おばあさんは夜トイレに行くから「大丈夫、大丈夫」と言ってきかなかった。これはおばあさんの僕という外国からのお客様に最高のおもてなしをしたいという気持ちだということが分かり、仕方なくベッドで寝ることにした。おばあさん、ありがとう。秋葉さん、ありがとう。

日 付：6月2日(土) 6日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：王藝霏

今日から楽しみにしていた2日間のホームステイだ。訪日第1日目に渡辺さんが、私のホストファミリーとなる木村さんが、私が日本アニメが好きなのを知り、ジブリ美術館のチケットを買えるかどうか調べていると言っていたのを思い出した。それを聞いた私は大喜びすると同時に、その偶然に驚いた。なぜなら日本に来る前に友だちが「ホストファミリーがジブリ美術館に連れて行ってってくれるといいね」と言っていたからだ。この知らせに神様に願いが通じたと思った。

朝、日中経済協会に行きホストファミリーが迎えに来てくれるのを待った。団員のみんなが次から次にホストファミリーに引き取られて行くのを見て、私のホストファミリーの木村さんが早く来てくれることを願った。また彼女がどんな人なのか好奇心が膨らんでいった。ついに彼女がやって来た。きれいな可愛らしいお姉さんだった。会ってすぐに彼女が何語で話したらいいか訊いてくれた(私の言った日本語に戸惑ったようだ)。次に彼女は何が好きか、何をしたいかを一つ一つ確認し、若者に一番人気の原宿に連れて行ってくれた。地下鉄に乗って行くことになった。地下鉄の駅では切符の買い方を教えてくれた。原宿に着くと、ジャニーズのプロマイドを売っている店を見た。木村さんは私につきあって辛抱強く列に並び、人でごった返している中、私の好きなKAT_TUNのプロマイドを一緒に探してくれた。人の熱気で店の中は非常に暑かったが、最後までつきあってくれた。買い物が終わる頃にはヘトヘトに疲れてしまったが、木村さんが昼ごはんを食べに連れて行ってくれた。

ジブリ美術館のチケットが買えなかったのを申し訳ないと思ったからか、東京スカイツリーのジブリ専門店に行くことになった。となりのトロなどの宮崎駿作品のキャラクターグッズが売られていた。次に日本みやげをいろいろ売っている場所——浅草に行った。木村さん(以下「優さん」と呼ぶ)お勧めのおやつと一緒に食べた。本当に美味しかった。お茶を買う時も、私が何のお茶が好きか分からないので、優さんは2種類のお茶を買い、「もし気に入らなかつたら自

分のを飲んでもいい」と気を遣ってくれた。

夜、一緒に家に帰った。彼女の家は東京から約1時間の千葉県浦安にあった。周囲にはたくさんの桜の木が植えられ、素晴らしい環境だった。家に着くと、優さんのお母さんが迎えてくれた。できるだけ英語で話しかけてくれてとても親切だった。お母さんは餃子を作るのがとても上手だった。私の包んだ小さな餃子を見て、二人が「可愛いね」と言った。優さんが包んだ餃子は具がたくさん入っていてパンパンにふくらんでいた。二人から何の料理ができるかと訊かれたので、トマトと卵のスープを作ることにした。お母さんは必要な材料を出すのを手伝ってくれたが、優さんは日中辞典を見ながら、私に「私は怠け者」は中国でどう言うのか訊いたりしていた。とても可愛いと思った。

中日折衷の夕飯を食べた後は一緒に二人の好きなバレーボールの試合を見た。私は自分の家族や学校、旅行で行ったことのある場所などの写真を見せた。二人とも「すごいねえ」「すごいねえ」と言っていた。こうして楽しい夜が過ぎていった。優さんがディズニーランドの打ち上げ花火が見えると言ったので、10階の廊下から夜景を見ながら優さんとおしゃべりをした。夢のようだった。お母さんが布団を敷いてくれた。私のためにわざわざ和室を用意して、畳を体験させてくれたのだと思う。気を遣って枕元に小さなスタンドまで置いてくれた。ぐっすりと眠ることができた。

日付：6月2日(土) 6日目

大学名：北京交通大学

氏名：牛駿宇

ここ数日に行った日本の名所や企業見学にはいつもガイドさんがついていてくれたし、仲間もいて、どこに行くにも一人ではなかったが、今日は単独で行動しなければならない。知らない日本の家庭に1泊するのだ。ホストファミリーを待っている間、とても不安だった。日本語が話せないのも、うまくコミュニケーションができるか心配だった。何をしても不安はつきものだ。自分は経験が足りないし、考え方も単純だが、いずれにしても時間は過ぎ、出来事もそれに連れて過ぎていく。あの時もし違うやり方、違う態度をとっていれば、もっと良い結果になっていたのだろうか。

期待を胸にホームステイという初めての経験に向き合うことにした。ホストファミリーに会ったとたん、緊張がほどけた。ホストファミリーは1組の若い夫婦で、とてもやさしそうだった。自分のほうから挨拶をした。彼らは中国で1年暮らしたことがあり、中国語が話せた。不安がまったくなくなった。

今日1日、いろいろな場所に行ってお互いのことを理解することができた。2人の温かいもてなしがとても嬉しかった。1時間余り電車で揺られ家に着いた。途中、ゴミ箱を一つも見かけなかった。以前にもゴミ箱がないのに日本の環境はどうしてこんなに清潔なのか不思議に思ったことがあったが、ホストファミリーの家に行ってようやくその理由が分かった。ゴミがしっかりと分別され、指定された場所に捨てられていた。ゴミは可燃物、紙類、ペットボトルなど非常に細かく分別されていて、目がチカチカしてしまった。一つひとつメモするしかなかった。日本は天然資源が少ないので、ぎりぎりのところまでゴミの再利用が行われていた。この点は中国も見習うべきだと思った。

ホストファミリーの家はとても清潔で、いろいろなものが整然と置かれていたので、少しも物が多いという感じはしなかった。特に空間の利用の仕方がすばらしかった。家はそれほど大きくないが、上から下まで立体的に仕切られ、いろいろな物が置けるようになっていた。国土の狭い日本から資源と空間の利用の仕方を教えてもらった。

日付：6月3日(日) 7日目

大学名：中国農業大学

氏名：楊妍

朝早く起きて今日の強行軍のための準備をした。まず色とりどりの日本式の朝食をとった。ホストファミリーで食事するのは2回目だが、日本の専業主婦は「えらいなあ」と思った。料理の時間が短い。しかも簡単な食材から一種の芸

術品にまで創り上げるその完璧な技術と熟練ぶりには驚かされた。日本の主婦の作る料理はレストランで出されるものと変わらない。見た目も味も抜群だ。日本人の細やかな心配りは生活のすみずみまで反映されている。日本人の生活に対する細かな配慮は随所に見られ、そうした美の創造と美の薫陶によって礼節と道徳観を生み出している。

出かける準備が終り、最初の目的地である皇居東御苑に向かった。皇居東御苑は皇居外周の東側に位置し、すばらしい環境と独特の造型をしていた。大阪城と同様に石垣の城壁があり、有名な富士見櫓があった。昔はこの櫓の上から富士山を見ることができたと言うが、今はビルに隠れてしまって富士山は見えないだろう。正門の装飾や庭園の灯籠など、公園にはいくつか戦火をくぐって残ったものがあった。

次に地下鉄に乗って浅草に行った。みんな午前中ずっと歩きづめで疲れ切っていたので、まず鰻屋に入って鰻重を食べた。ウナギはタレに浸してから炭火で焼いた後、切り分けてご飯の入った重箱に盛り付ける。鰻重は今までに食べたことのある日本料理の中で一番美味しかった。甘くて魚の生臭さがちっとも無くて美味しかった。

食事の後は浅草寺に行った。日本の寺は中国と違って舎殿の中に仏像を祀っていない。参拝する時も決まった手順がある。先ず舎殿前の手水鉢の水で口を漱ぎ、賽銭箱に硬貨を投げ入れてから参拝する。参拝の後はおみくじを引いて未来の運勢を占う。次に浅草寺前の賑やかな商店街に行った。いろいろな日本ならではの食べ物売られていたが、人形焼を買って食べた。

時間はアツという間に過ぎていった。ホストファミリーとももうすぐお別れだ。子どもたちがとても寂しそうに見えた。ホテルに戻る地下鉄の中では、わざと別れるという話題を避けるようにしていたが、やはり最後の別れの時は来た。ホテルに着くと、私たちは抱き合って別れを惜しんだ。

日 付：6月3日(日) 7日目

大学名：中国交通大学

氏 名：張萼

今日はホームステイの2日目、9:30に起きて本場の日本式の朝食を食べ、それから少しゆっくりした。私はGoogle Earthを使って瀋陽の家や大学、宿舎を見てもらい、ホストファミリーの人たちもタイにいた頃住んでいた家や花菜ちゃんが通っていた幼稚園を見せてくれた。

11:30、予定通りに家を出て地下鉄で渋谷に向かった。渋谷では花菜ちゃんがプレスレットを自分で作れる場所に連れて行ってくれた。記念にといっしょに2本の「花*E」のプレスレットを作った。次にハロー・キティの買い物をした。楽しい時間が経つのは早いもので、すぐに3:00になってしまった。名残惜しかったが、ホテルでお別れをした。美喜子さんも私も涙目になっていた。別れる時に中島さんがたくさんのプレゼントをくれた。私がOne Pieceとハロー・キティが好きなのを知っていて、ハロー・キティと One Pieceの靴下を買ってくれた。その時のことを思い出すと、今も泣きたくなる。中島さん一家のことはこれからも懐かしく思い出さずことだろう。やさしい中島さんと美喜子さん、お茶目で可愛い花菜ちゃん、恥ずかしがり屋の太介君。最初で最後の日本家庭でのホームステイかも知れないが、きっと青春時代の良い思い出になるだろう。今回のホームステイは私に日本国民の友情と真心を実感させてくれた。日本のことを思い出すたびにこの国の人々の温かさで真心を感じるだろう。

ここまで書いても心はまだ感傷的な気持ちで満たされている。この2日間のホームステイで自分の考え方が変わったように思うが、それは中島さんの意見や提案を聞いたことと、友好的な日本国民に触れたからだ。中島さん一家に、そして中日友好協会が与えてくれた機会に心から感謝する。中島さん一家がこれからも健康で幸せでありますように……。

日付：6月3日(日) 7日目

大学名：首都師範大学

氏名：孫麗娜

今日一番楽しかったことは、何と言っても翔ちゃんや遼ちゃんと一緒に遊園地に行ったことだ。(ホストファミリーのお父さんとお母さんは翔ちゃんと遼ちゃんにお客をもてなすことを知ってもらうために、わざと子どもたちだけで私を連れて遊びに行くようにした。兄弟2人ともおとなしくて、遊園地にとっても興味を持っているようだった。きちんとしていて、まるで「小さな大人」といった感じで、とても可愛らしかった。2人とも面倒見がよく、途中「どこに行きたいか」、「何が食べたいか」、「何に乗りたいか」あれこれ訊いて来た。私の提案でジェット・コースターに乗ることになったが、3人とも絶叫。とてもエキサイティングだった。次にコンピュータゲームをして遊んだ。バスケットボールや釣りなど、ほとんどのゲームを試した。遼ちゃんがいろいろと知恵を絞ってリラクマ(Rilakkuma)を取ってくれて嬉しかった。遊び疲れたので座ってアイスクリームを食べた。大きな、超おいしいマンゴー味のアイスクリームだった。ちょうど音楽ユニットのサイン即売会があるということで遊園地には人が溢れていた。(ちなみに遼ちゃんと翔ちゃんはそのユニットのことは知らなかった)。お兄ちゃんのほうは怖いのが苦手なようで、私と遼ちゃんがお化け屋敷に入ろうと言うと逃げて行こうとした。私と遼ちゃんが冗談で切符を3枚買うと言うと、とても困っているようだったので、私と遼ちゃんはからかうのをやめた。お兄ちゃんのためにお化け屋敷に行くのはやめて、昼食をとることにした。2人は私が「何でも構わない」と言うと、冷やし中華の店に連れて行ってくれた。ずいぶん長いこと並んだ。美味しさこそ成功の道！兄弟2人とも2人前の冷やし中華を食べた後にまた主食を注文して一緒に食べていたが、その様子を見て「仲がいいなあ」と思った。

遊園地で遊んでいる時も、2人は親切に日本の簡単なゲームについて教えてくれた。いろいろと見て回った後、電車に乗ってお父さんとお母さんに合流した。集合場所は上智大学だったが、ちょうどアメリカンフットボールの試合をやっていた。とてもエネルギーで、チアガールのダンスもとても良かった。私たちはいっしょにホテルに向かった。上品なお母さん、やさしいお父さん、そしてカッコ良い愛すべき兄弟と別れるのがつらかった。一家は私のためにたくさんのプレゼントを用意してくれ、中国に帰ってからも連絡してほしいと言った。

藤森さん一家の温かい心遣いと心のこもったもてなしに感謝している。私はこの一家の中に日本と中国で一番大事にされている品性、つまり謙虚さと礼儀、温和な態度と上品な物腰、細やかさ、積極性と楽観性、独立心……見たような気がする。

日付：6月3日(日) 7日目

大学名：首都師範大学

氏名：孫鑑

朝7時、目覚まし時計が鳴った。すぐに起床、洗面を終え、身支度を整えて……7時半、チビちゃんを起こし、それから部屋を片付けた。約束通り8時には細野さんの住む部屋に戻った。

朝食の後、細野さんと直弘君と一緒に近くの公園にゴミ拾いのボランティアに行った。一家の住むマンション300世帯余りのうち約10世帯が交代で毎週末に公園を掃除するのだという。これが本当の環境保護だと思った。もともときれいな公園にはゴミはいくらもなかった。9時半前には家に帰り、テレビでOne Pieceを見た。みんなでテレビの前に座り、お菓子を食べ、お茶を飲み、一家団欒を味わった。

One Pieceの番組が終わると、浅草寺に向けて出発した。1時間ほどで着いた。浅草は本当に人気のある場所で、人また人といった感じだった。昼食に美味しい定食を食べ、2歳になる姪のために浴衣を買った。

次にスカイツリーに行った。思った通り見物客は浅草よりも多く、2棟のビルいっぱいスカイツリー関連のグッズを売る店があったのには驚いた。時間はアツという間に過ぎた。ホテルに戻らなければならない時間になった。別れる時、真弘君がとても寂しそうだったのでSkypeやメールアドレスを教えた。この家族のことを懐かしく思い出すことだろう。

ホテルに戻ると、大急ぎで荷物の整理をして、一行30数名は秋葉原に向った。ショッピング大作戦の始まりだ。それからお台場にも行った。夕食は自分たちで自由にとることになっていた。ここでは詳しく書かないが、要するに派手にお金を使った。ホテルに戻った時はぐったりと疲れ、お風呂に入ってすぐに寝た。

日 付：6月4日(月) 8日目

大学名：国際関係学院

氏 名：呂凱健

中日友好に努め、民間交流を強化する。

今日はもう訪日8日目、いつの間にか予定の半分以上が過ぎてしまったことに今日初めて気がついた。帰国の日が迫っている。いつもみんなと一緒にいたせいか、時間の経っていることにちっとも気づかなかった。本当に誰が欠けてもダメだったと思う。

午前、これまで日本一の高さを誇っていたテレビ塔——東京タワーに行った。次の代表団はきっとスカイツリーを見学するんだろうなあ……。その後、和洋折衷の日比谷公園で少し休憩した。東京はテンポの速い都市なので公園がとても気持ち良く感じた。

圧巻は次の見学場所だった。2008年に胡錦濤主席が訪日した時に食事をしたフレンチレストランの松本楼だ。松本楼は今回の訪日活動の重要な一環で、孫中山、宋慶齡と梅屋庄吉夫妻との友情、中日友好の証であり、歴史的にとっても意味のある場所である。松本楼は近代に中日両国の橋渡しの役割を果たしただけでなく、今も両国が心を通じ合わせるための掛け替えのない場所になっている。2008年5月6日、胡主席と福田康夫首相がここで夕食を共にし、日中間の10年来の「氷を砕く旅」が始まった。私たちが今日ここで食事したというのも、今も中日両国が共に中日友好のために努力していることの表れだと思う。今回のような大学生の交流は(中日友好にとって)不可欠なことだと思うが、それは決して簡単なことではない。そういう意味で、団員の誰もが今回の訪日を大事に思っている。

次に日本で第2位にランクされるという「早稲田大学」を見学した。同校は6万人弱の学生と6千人の教職員を擁する、学費も高額な名門私立大学だという。自由を尊重する校風のためか、いくつか興味深いエピソードが紹介されたが、ここでは省略する。早稲田大学の学生たちとの交流はとても楽しかった。何か具体的な知識や技能が学んだということではなく、英語、日本語、中国語が飛び交い、まるで国境がなくなったような感じがした。言葉がうまく通じなかったとしても、双方の気持ちは伝わっているようだった。みんなが楽しんでいるのを見て、こっちまで愉快的な気持ちになった。これがいわゆる「楽しさが伝染する」ということなのだろう。今回のこうした機会に恵まれたことに感謝すると同時に、日中両国の国民が更に打ち解け合い、お互いに理解を深めていければいいなあと思った。

日 付：6月4日(月) 8日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：王芳

午前中は東京タワーの見学だった。今、一番の人気スポットは新しく開業したスカイツリーだが、東京タワーには歴史の重みがある。TVドラマや映画にも東京タワーの場面がよく登場する。梁静茹の——東京タワーからの初めての眺め——という歌詞を思い出した。

次は日比谷公園の松本楼に行った。松本楼では胡錦濤国家主席と同じような応対を受けた。小坂文乃さんからは松本楼の歴史と孫文と梅屋庄吉の深い友情、孫文と夫人・宋慶齡の感動的なラブストーリーについての説明があった。梅屋庄吉は1895年に孫文と香港で知り会って以来、孫文による中国革命の熱心な支援者となった。梅屋庄吉は帰国後、さまざまな事業を手がけ、そのお金で孫文の革命事業を援助した。辛亥革命が最高潮に達していた時期、

梅屋庄吉は日本に亡命していた孫文を日本の名士に紹介し、何度も松本楼に招待している。梅屋庄吉夫人は孫文と宋慶齡の仲人であり、2人の恋愛が周囲から大反対された時にも2人を支え続けた。松本楼の1階に飾ってある写真の中に孫文と宋慶齡の結婚写真があるが、その写真の中央に写っているのが梅屋庄吉夫人だ。1階には宋慶齡がよく弾いていたというピアノが置かれていた。孫文の死後、中日関係が悪化し、それまで中日友好を支持していた人たちの気持ちも離れていったが、梅屋庄吉は中日友好こそがアジアの平和を保証するという信念から、孫文が亡くなると、4体の彫像を作って中国に寄贈している。それ以外にも中日の革命事業を扱った映画を撮ろうという計画もあったが、満州事変により実現しなかったという。こうした歴史物語に心が震えた。

午後は早稲田大学を訪問して学生たちと交流した。自分の夢についてディスカッションをした。早稲田大学のようなトップレベルの大学の学生はきっと大きな夢を持っているに違いないと思っていたが、ディスカッションを終えてみると、日本の大学生のほとんどが平凡で幸せな生活を夢見ていることが分かった。十年後の夢は、好きな人に巡り合い、温かい家庭を築き、子どもを育てることだという。どの国も若者の考え方は似たようなもので、人生観や価値観がとても似ていると思った。

懇親会では早稲田大学の数名と親しくなり、楽しくおしゃべりすることができた。学生の多くが中国に非常に興味を持ち、中国語を勉強しているとのことだった。中国の発展につれて、今後ますます多くの日本人が中国に興味を持つことになるだろう。日本の大学生にも中国を訪問し、中国の大学生と交流する機会があればいいと思った。

日 付：6月4日(月) 8日目

大学名：首都師範大学

氏 名：楊言

今日は松本楼と早稲田大学を訪問した。松本楼では胡錦濤主席並みの待遇だった。小坂さんの説明で梅屋庄吉と孫文の揺るぎない友情と孫文と宋慶齡のラブストーリーを知った。もし梅屋庄吉がいなかったら、孫文の革命事業も成し得なかつたろうし、あの「君が蜂起するなら私が財政面を支援する」という約束が、2人の鮮やかな一生を決定づけた。それは苦難の連続だったと思うが、心の底から敬服する偉大な事業だった。

梅屋庄吉は中日関係のために生涯力を尽くし、孫文の死後も2人に共通する信念を断固貫き通した。中日関係が硬い氷に閉ざされた時期もなお諦めず、中日友好のために一心に努力した梅屋庄吉に感動を覚えた。中日両国は様々な問題により、その関係は良い時期も悪い時期もあり不安定だが、国の将来を担う世代としては、中日両国の交流と中日友好のために貢献しなくてはと思った。特に日本語を勉強している者は、中日友好のために力を尽くし、心のかげ橋となり、梅屋庄吉の意志を引き継いでいかなければならないと思った。

午後は早稲田大学を見学した。言うまでもなく、早稲田大学は優れた日本の私立大学であり、校内のアカデミックな雰囲気がとても良かった。早稲田大学の学生にキャンパスを案内してもらい、大学の学習環境を肌で感じる事ができた。また、先生の説明によって早稲田大学についてさらに理解を深め、大学の建学精神が「自由」だということを知った。早稲田大学の自由の精神は学生のイノベーション的思考を育むのにはとても有効のようだった。学生は自由な雰囲気の中で3000余りのサークル活動を通して積極的な考え方を学び、臨機応変に物事にあたる術を覚えていくのだろうが、中国の大学にはこうした自由の雰囲気が足りないような気がした。キャンパスを見学した後は、早稲田大学の学生たちと「10年後の私の夢」というテーマでディスカッションをした。みんな積極的に自分の意見を発表した。早稲田大学の学生がなるべく日本語を話すように励ましてくれた。その後に行われた懇親会ではみんなで楽しく語り合った。プレゼントを贈ると、中国の工芸品(中国結び、切り絵、染付で出来た葉など)をとても気に入ってくれたので嬉しかった。中国に遊びに来るように言うと、彼らが中国文化にとっても興味を持っていることが分かり、何とも誇らしい気持ちになった。中国文化がこんなにも海外の人たちを惹きつけていることを嬉しく思った。数時間にわたる学生との交流で私の日本語も鍛えられたようだ。別れるのがとても惜しい気持ちになった。(仲良くなった早稲田の学生とは)今後も

連絡を取り合っというと思う。

日 付：6月5日(火) 9日目

大学名：国際関係学院

氏 名：李中石

午前中、三菱東京UFJ本店を訪問した。最初に営業部と貸金庫を見学したが、特に金庫の見学が印象的だった。幸運にも金庫の内部を見学することが出来たが、これはなかなか出来ない経験だった。その後、清華大学日本語学科を卒業し、北京支社から本店に研修に来ているというきれいな先輩が、銀行業務と金融派生商品について説明してくれた。簡単で分かりやすい例を挙げて複雑な経済知識を教えてくれたのでとても勉強になった。

午後は中華人民共和国駐日本国大使館を訪問し、程大使と大使夫人に会うことができた。各大学の代表がそれぞれ感想を述べた。大使はそれに真剣に耳を傾け、最後に自らの中日両国関係に関する見方について率直に話してくれた。大使の話で中日両国関係がいかに複雑かということが分かった。

大使館の訪問の後は、楽しみにしていた東京ディズニーランドに行った。子どもの頃に見たディズニーアニメのキャラクターを目の当たりにしてみんな大喜びだった。一番印象的だったのは夜のパレードだ。色とりどりのフロートが1台1台ゆっくりと園内をパレードする様子に大人も子どもも大興奮だった。もう一つ感心したことに園内で働くスタッフの協調能力の高さ、それに入園者のマナーの良さがある。たくさん家族がベビーカーを押して遊びに来ていたが、みんな自発的にベビーカーを1カ所にまとめて置いた後は道端に座りこみ、立ったりする人などいなかった。パレード終了した後もゴミがまったくなかった。「百聞は一見にしかず」、またも日本国民の民度の高さに驚かされることになった。

日 付：6月5日(火) 9日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：楊天笑

AM9:43 今日の最初の訪問先は三菱東京UFJ銀行だ。今回初めて金融機関を見学することができた。この分野の知識に乏しいので、見学の視点も浅いものだったと思うが、一番印象に残ったのは金庫だった。厚さ約1mのドアによって一つ一つ仕切られた貸金庫が外界と隔てられていた。この金庫は個人向けのもので、合法的な物品ならば誰でも預けることができるというのが面白かった。銀行の側から言うと、銀行には利用者のプライベートについて知る権利がないので、利用者が預けた物品が合法的なものであるかどうかについて銀行は知る事ができないために、すべてお互いの信頼関係の上で成り立つビジネスだというのが印象的だった。次に実際に業務を行っている部屋を見学した。毎日10台のパソコンの画面と各種情報を睨みながら業務を行っているという。案内係の説明によって金融業務についての基本的なことを理解することができた。職員の人たちと一緒にとった昼食は日本の「弁当」だった。包装も料理も何から何まで非常に精巧にできていた。同じテーブルに座った広報部の女性はとても若く見えたが、もうすぐ50歳になるという。同じテーブルの人たちと将来の夢や希望についていろいろと語り合い、多くの事を学んだ。

AM 10:42 中国駐日本国大使館を訪問した。光栄にも程大使と大使夫人に会うことができた。学生たちがここ数日間の訪日の成果を簡単に発表した後、大使から自分自身の経験や中日関係についての見方に関する話があった。中日両国は昔からずっと友好関係にあったが、ここ100年の間に仲たがいがいし、関係が悪化し、中国人に消すことのできない傷跡を残した。しかし、中日が友好関係を維持することは、東アジアにとって非常に重要なことであるので、中日関係を理性的に分析し、そこから学び、中日両国は共に発展していくことが求められている。そして僕たち学生にはその中で決定的な役割を果たす必要がある。今回訪日の機会に恵まれなかった人たちと比べると、僕たちは日本についての理解を深め、日本の企業や日本人に見習うべきところのあることを知った。また、ホームステイや大学生との交

流を通して大多数の日本人の中国に対する見方を知ることができた。日本人の中国に対する友好の気持ちや中国の経済発展に対する羨望は、中日両国が互いに交流し学び合うための条件であり、日本人との共同事業の一つひとつを大切にすることが必要があるように思う。要するに、日本は先進国として中国が抱えている多くの問題の解決策をすでに持っているし、日本企業はまさにそれをコントロールしながら中国市場に進出していると言える。こうしたやり方は双方にとって有利な発展モデルだと思う。

PM4:07 最後にディズニーランドに行った。が、これが今回の訪日で最も辛い思い出になった。入場後3分で2度迷子になり、どんなに探しても仲間の姿が見つけれず、やむを得ず1人であるアトラクションに飛び込んだら、前も後ろもカップルばかりで、楽しそうにおしゃべりしていた。列に並んで待っているとき、1人でもいいから訪日団のメンバーが現れないかと願ったが、期待もむなしく、やはり1人でボートに乗る羽目になった。一人ぼっちの寂しさがつり、何ともつらかった。友だちの存在がいかに重要かを実感した。

AM2:00 明日の発表のために2時まで原稿を書いていた。明日の発表がうまくいきますように。

日 付：6月5日(火) 9日目

大学名：北京交通大学

氏 名：景鵬

三菱東京UFJ銀行への訪問は日本の銀行サービスに関する認識を一新した。サービスカウンターが防護ガラスで覆われていることもなく、全体的に開放的な感じがした。一人の日本人顧客が応対を受けていた。その様子を見ると、銀行側の応対はとても親切で、職員の熱心な仕事ぶりや責任感が感じられた。ロビーには基本的な設備のほか、団扇や雑誌、新聞が置かれていた。まるで中国の高級ホテルのようだった。そこには待ち時間を快適に過ごすための環境があった。

昼食は三菱東京UFJ銀行の職員と一緒に食べた。美味しいサンドイッチを食べながら仕事や教育、これからの銀行などについて話したが、こうした交流によって日本の大手商業銀行が社員に何を要求しているのかがよく分かった。大卒という学歴は銀行で働くには十分で、銀行は深い専門知識を必要不可欠なものとして新入社員に要求しているというよりも、むしろ総合能力のほうを重視しているようだった。金融の巨頭企業がこのような採用時の評価体系を持っていることに驚くと同時に、新入社員に対しては企業が教育訓練を行うなど、日本企業の社員に対する責任が感じられた。また、職員の高い業務能力と対応してくれた案内係のまじめな態度と責任感に感服した。

中国駐日本国大使館では程大使が訪問団に会ってくれた。座談会では、程大使によって中日関係40年来の軌跡と新時代を託す中国青年への期待が語られた。程大使の話聞いて、民間にどれだけ中日友好の基礎があるか、両国の友好関係がそれぞれの国民にとってどれだけ意味のあることであるかが分かった。各大学の代表が今回の「走進日企・感受日本」活動で学んだことや感想を発表した。団員たちの様々な視点を通して、今回の訪日が中国の大学生一人ひとりに大きな影響を与えたことをあらためて感じた。中国と日本の間には長い友好往来の歴史があり、両国の文化には多くの共通点がある。両国人民の友好関係は誰もが期待することであり、日中各界の発展にも影響を及ぼす重要な課題でもある。21世紀という新しい時代を担う青年として責任の重大さを思った。日中友好と平和のためにこれからもっと努力していこう。

夜のディズニーランドツアーは夢のような体験だった。ディズニーランドは楽しい所だと訊いていたが、まさか本当に来れるとは思わなかった。ディズニーランドを通して日本のテーマパークの環境や秩序を見ることができた。大勢の入園者にもかかわらず、清掃員が頻繁にゴミを拾ったり掃除をしたりしているのでどこも清潔だった。また、行列の長いアトラクションでは、スタッフが随時列を整理して、できるだけ多くの人をウエイティングエリアに入れるようにしていたが、その臨機応変な対応や園内スタッフのてきぱきと働く様子がとても印象的だった。

日 付：6月6日(水) 10日目

大学名：国際関係学院

氏 名：王瀚霖

飛行機の座席でこの10日間に日本で起こったことの全てを思い起こし、時間の過ぎる速さを感じている。今日の午前は6日間泊まったホテルニューオータニの水と厨房のリサイクルと電気供給システムについて見学したが、中国のホテルは日本のホテルに学ぶところがたくさんあると思った。まず、微生物によって水を沈澱させるという新手法は、普通中国で行われている化学薬品を使った方法とはだいぶ異なる、コスト節約が可能な方法だと思う。冷房は普通のエアコンではなく、電気使用のピーク時と冷房利用のピーク時をずらし、前日に作った氷による冷気を翌日の昼間に提供していた。とても賢い方法だと思った。

見学の後は歓送会だった。日中経済協会、日本商会、日中友好協会の関係者をはじめ、ホームステイ先の人たちがホテルニューオータニに集まり見送ってくれた。会場に着くと、秋葉さんの弟さんの名札しかなかったので、秋葉さんが用事で来られなくなったのかと思い電話したところ、今こちらに向かっているところだった。それをきいて嬉しくなった。まるで北京の大学に入る時に家族に見送られた時の喜びと似ていた。記念に自分で描いた絵はがきと中国の民家を紹介した本を秋葉さんにプレゼントすると、秋葉さんも「お土産」としてスポーツジムのTシャツ、ハンカチ、ブックカバー、キーホルダーをくれた。今日はウイークデーなので、1時間ほどの昼休みしかない秋葉さんは、上司に休みをもらってこの歓送会に参加してくれた。本当に嬉しかった。別れるのがとても辛かった。

秋葉さん、おばあさん、純君、必ずまた日本に来るので、その時また会いましょう！

日 付：6月6日(水) 10日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：趙先明

10日間の訪問が終ろうとしている。午前のホテルニューオータニの見学では、中国の立ち後れた状況と環境やエネルギー節約意識のなさを認識させられた。地下から地上までホテルニューオータニの環境への配慮は文句のつけどころがないほどだった。よく言われているように、国土が狭く、資源のない日本が技術進歩やイノベーションによって得たものの多さに驚かすにはいられなかった。

ゴミ処理、ホテルの暖房供給、冷房、廃水処理など、どれも先進技術が使われていたが、これらはまさに中国に欠けているものだと思った。技術的にも人々の意識においても日本のようになるまでにはまだ相当長い時間が必要であり、僕たちのような若い世代の力にかかっているのだと思った。お昼は訪日団のために歓送会が開かれ、責任者の挨拶や楽しい交流があった。この10日間で自分の人生に与えた影響は計り知れない。

空港に向かう車の中で渡辺さん、ガイドの呂さん、団長、郭部長、妍先生も言っていた。この10日間の旅行でいろいろと学んだことのすばらしさは、これからの人生の中で徐々に解っていくことなのだろうと思う。

今、飛行機の中でこの10日間の旅を思い返してみる。言葉では言い尽くせないほどたくさんのことを学び、いろいろなことを考えさせられた。若い時にする旅はその人の一生に影響を与えるということを聞いたことがある。その通りだと思う。視野を広げるという面でも生活の面でも間違いなく大きな影響を受けたが、それらはこれからの生活の中で徐々に感じとっていくものなのかもしれない。

飛行機が着陸すれば10日間の旅も終る。その全てが忘れることのできない貴重な思い出だ。

中日友好の理念を受け継いで学生使者としての務めに励もう！

日本よ、さようなら、日本企業よ、さようなら。

本当に多くのことを学んだ。何と収穫の多い旅だったことか！！！！

日 付：6月6日(水) 10日目

大学名：中国農業大学

氏 名：王丹

今日は日本訪問の最後の日。今、北京に向かう飛行機の中にいる。思えば、今日も感動の1日だった。朝はホテルニューオータニの人に連れられてホテルの環境施設を見学した。ゴミは分別された後にそれぞれ別々のゴミ処理場に運ばれて処理されると思っていたが、ニューオータニでは自分でゴミを処理していた。それにリサイクルまでしていた。一例を挙げると、トウモロコシの皮は焼却処理するのではなく、乾燥処理を施してほとんど臭いのない有機肥料に変える。これらの肥料は無料で農家に提供され、農家はその肥料で農作物を育てる。できた農作物は再びホテルに送られて来るという具合だ。ホテルにとっては、ゴミを有効に処理できるだけでなく、新鮮な農作物をレストランに提供できるのでまさに一挙両得である。

スタッフの案内で厨房の汚水処理システムや発電システム、バラ園を見学した。「醜」から「美」、「苦」から「甘」といった見学コースだった。中国は人口が多く、出るゴミも日本より多いので、中国もゴミをしっかりと分別し、それを処理し、リサイクル利用できるようになれば、ゴミは「宝」となってエネルギーをつくることのできるほか、環境保全をしっかりと行うことで人々の生活をより美しいものにすることができるだろう。

見学の後は荷物を整理し、歓送会の会場へ行った。2列に並んで日中経済協会、日本商会、早稲田大学、ホームステイ先の皆さんを迎えた。ホームステイ先のナカタさんとはお互いに目で挨拶した。日本人と何も言わなくても解り合えることがとても嬉しかった。ナカタさんとまたおしゃべりすることができた。ナカタさんにもっと仲良くなるために、是非北京に来て中国文化に触れてほしいと言うと、彼も私が日本にまた来てずっと付き合いが続けばいいと言った。

歓送会の後、バスで空港に向かった。ガイドの呂さんや渡辺さんと別れる時は本当に辛かった。思えばガイドの呂さんは父親のように、渡辺さんはおじいさんのように私たちを守り世話をしてくれた。本当に別れるのが辛かった。10日間の日本訪問は終わった。日本で学び、感じたことをこれからの人生に活かし、周りの人たちに伝えていこう。